（第三種郵便物認可）

人語り モノ語り

# 弘前ねぷた 柳井で進化

## 金魚ちょうちん

## 愛らしい姿 人気全国区に

輪郭と目と口がまん丸の愛らしい表情をたたえ、赤い体を風に任せてゆらゆら揺らす。柳井市の民芸品「金魚ちょうちん」。市中心部の観光名所、白壁の町並みでは軒先につるされ、通行人を楽しませる。

「ここは金魚の産地ですか」。初めて柳井を訪れる観光客たちの最も多い質問だ。答えはノー。二つの関係性は柳井が商都として隆盛を極めた江戸期にさかのぼる。白壁の町並み近くが海岸線だった当時。柳井の豪商は自らの北前船を北陸へ走らせていた。

### 北陸経由で伝来

「青森・弘前藩の金魚ねぷたが海を渡ってきた」。郷土史に詳しい市教委社会教育指導員の松島幸夫さん(69)は説く。同藩の幕府への献上品だった金魚を庶民が楽しめるようにしたあんどんが形を変え、幕末に北陸経由で波及したとみる。

柳井では、染め物とろうそくを生業とした商人がまねたと伝わる。竹ひごの骨格を包む和紙に染料で色づけする際、ろうを塗ってにじみを防いで作るのが伝統の技法。「材料が手元にあり好奇心が湧いたんでしょうな」と松島さんは地元の祖先に思いをはせる。

夏には柳井金魚ちょうちん祭りがあり、白壁の町並み一帯に約4千個が飾られる。今や柳井の民芸品の代名詞となった金魚ちょうちん。もともと各家庭が子どもの玩具として作っており、戦中や戦後しばらくは困窮のため急速に廃れ、伝統が途絶えそうになった。興味を持つ人が細々と再現を続ける程度となった。

半世紀ほど前、転機が訪れた。小学校教諭だった故河村信男さん（1928～2012年）の存在だ。趣味で作り続け、普及に力を入れた。「家族より優先するほど」と息子の秀昭さん(53)は苦笑交じりに振り返る。横長だった口や輪郭をより愛嬌(あいきょう)ある現在の形に改良したという。92年に始まった祭りの開催にも尽力した。

### グッズ200種以上

手作りできる土産物として定着。ノートやステッカーなどのデザインにあしらった商品も200種以上に広がった。近年は東京スカイツリーやすみだ水族館など首都圏に登場し、マツコ・デラックスさんの番組で取り上げられ、人気は全国区に浮上。英国や中国・上海、台湾など海外イベントにも飛び出した。

生前、河村さんは自前の工房の開設と外国での実演が夢と語っていた。他界した翌年、家族が白壁の町並みに工房を構えた。最近の金魚ちょうちんの活躍にも「喜んでいるでしょうね」と秀昭さんは目を細める。

伝来から約150年。昨年は「先祖」の金魚ねぷたとの再会を果たした。住民団体「柳井市白壁の町並みを守る会」の40周年を記念した弘前市との交流事業で柳井に金魚ねぷたが訪れ、夏の弘前ねぷたまつりには金魚ちょうちんが並んだ。

「温故知新。素晴らしい観光交流の縁ができた」と守る会会員の木阪泰之さん(57)。単発で終わらせないよう、今年も金魚を活用した交流を試みるが、新型コロナウイルスの感染拡大が影を落とす。「祭りが30年目となる来年に向けた対応もしたい」と思案する。

江戸から時を超えて令和へ。金魚ちょうちんは進化を続け、新たな時代に泳ぎだそうとしている。

（堀晋也）

弘前市の金魚ねぷたを手に今後の交流の展望を話す木阪さん㊧と、戦後間もないころの金魚ちょうちんを持って由来を説く松島さん　（撮影・山下悟史）

白壁の町並みの軒先で風にそよぐ金魚ちょうちん

べた。6月6日に開催を予せする。29日までの支給る。予約の受付時間は、午柳井 午前10時、市議会臨

消費税を含む

| 産地市場 萩 | 下関 | | 仙崎 |
|---|---|---|---|
| — | 395 | 302 | — |
| — | 244 | 237 | — |
| — | — | — | — |

## 新型コロナウイルス相談窓口

※緊急の場合は夜間も対応

| 施設名 | 平日（午前9時～午後5時） | 休日 |
|---|---|---|
| 岩国健康福祉センター | 0827(29)1523 | |

県内の感染
県内の感染
光市2人。下
3人。山口市
人。山陽小野